

大阪市立美術館蔵「洛中洛外図屏風」(田万家旧蔵本)の研究・補論(一)

知 念 理

はじめに

本誌第十四号(平成二十六年)に「大阪市立美術館蔵「洛中洛外図屏風」(田万家旧蔵本)の研究」を載せた。大阪市美本に関する各専門分野からの従来の指摘、言及を可能な限り網羅的に拾い出し、それらの検証を通じて科研C群(従来、林家本系と呼ばれる作品群)における新たな位置づけを探った。

そこで十分な検討が及ばなかった事象として、町家の形態、飛雲閣を含む西本願寺の寺観、淀周辺の景観、諸職、群像の描写などをあげた。順次これらに関して補論を加えてゆく考えであるが、まず本稿では町家の建築表現について考察する。第二定型諸本の町家をめぐる近年の絵画史料論をふまえつつ、大阪市美本の描写を確認し、前稿で得た科研C群におけるその位置づけを補完しておきたい。

一 分析事象―町家の富裕表現

林原本(林原美術館蔵)は第二定型諸本のなかでも特徴ある町家の建築表現を有することで知られている。建築史の谷直樹氏は、十

七世紀前半における京都の町家建築の意匠、技法面での多様な発展の特質がよく表現されている、という見方から林原本の描写に早くから言及し、続く十七世紀後半には触書などの建築規制により、その町なみが均一化の方向へ転じたことを指摘していた⁽¹⁾。近年では丸山俊明氏、高屋麻里子氏らが、林原本ほか第二定型作品に描かれた町家の多様性を、安定回復した都市の町人層らの財力を象徴する「富裕表現」、「富裕の印」と位置づけ、建築史の立場から絵画史料論的分析を試みている⁽²⁾。

とくに注目したいのは丸山氏の論考で、第二定型諸本を中心とする絵画史料と十七世紀後半の建築規制に関わる文献史料に基づき、近世京都の町なみ景観を特徴づける富裕表現の変遷を考察した。豊臣政権の二階建て政策以降、「多層・多様化」が進んだ京都の町なみは、寛永十九年(一六四二)の京都所司代による触書を転換点に、さまざまな建築規制の影響で「低層・均質化」へと向かった。そして宝永大火(一七〇八)後の復興で、残っていた表蔵が敷地奥に曳かれてその変容を完了させる、と結論づけている⁽³⁾。

言及された作品個々の制作期の認識については、美術史的な見地

から修正の余地も残ると考えるが、描かれた町家の富裕表現と洛中洛外図の制作年代に一定の同期・連動性をみる同氏の絵画史料論の「前提」はたいへん興味深い。後述のように、専門的立場を違える美術史的観点からも広く検証を試みるべき事象ではないかと考えるからである。

丸山氏が一連の論考の中で説く、まず「多層・多様化」へ、その後「低層・均質化」へ、という十七世紀京都の町なみの変容はおよそ次の1から4のような富裕表現（各種建築的様態）によって表象（絵画化）されるものと解される。

- 1 屋根（柿葺、瓦葺）と卯建
- 2 階層（厨子二階、二々四階建、楼閣・櫓）
- 3 土蔵造（庭蔵、突出内蔵、表蔵）及び各種塗家
- 4 上層開口（裝飾窓、板戸、平格子・出格子、土塗格子ほか）

これら富裕表現の十七世紀における相対的推移に関する整理をひとまず以下に示す。これは丸山氏の論考を参考に、稿者自身による諸本描写への観察を加味した現段階でのメモである。各時期（ステージ）の区切り（年代）、第二定型作品の例示については稿者の作品観によつた暫定的なものであることを断っておく。とくに「●低層・均質化 ステージⅠ（寛永後期〜万治頃）」、「●低層・均質化 ステージⅡ（寛文頃〜元禄）」の両ステージについては未確認作例も多くあり、今後、内容的に大幅な修正をかけてゆく必要がある。

大阪市美本は「●多層・多様化 ステージⅡ（元和〜寛永前期）」に分類できると考える。

〔町家に関する富裕表現の相対的推移と第二定型諸本〕

●多層・多様化 ステージⅠ（慶長〜元和初め）

（出光本・堺市博本・京博A本・勝興寺本など）

柿葺が次第に増加

厨子二階・二階建・卯建が普及

庭蔵が散見されるが表蔵はない

突出内蔵、瓦葺塗家が出現

土蔵造に土塗格子（ムシコ）が出現

二階表開口は開放的で、板戸や平格子が優勢

●多層・多様化 ステージⅡ（元和〜寛永前期）

（神戸市博本・林家本・大阪市美本・萬野A本など）

突出内蔵が増加、表蔵が出現

瓦葺塗家が次第に増加

土蔵造、塗家の開口に土塗格子（ムシコ）が普及

二階表開口は平格子に加え出格子が普及

二階座敷の居室利用（少人数）

●多層・多様化 ステージⅢ（元和後半〜寛永前期）

（林原本・サントリー本・本田家本など）

庭蔵、表蔵が高層化、町なみの高低差が顕著

瓦葺塗家が顕著に増加

二階表開口の意匠が多様化（多種の格子類と裝飾窓）

二階座敷の居室利用（多人数）

●低層・均質化 ステージⅠ（寛永後期〜万治頃）

（田辺市美本・歴博D本など）

二階建が減少、厨子二階が増加

二階表開口（土壁・土塗格子・出格子）に閉鎖性
柿葺、瓦葺が優勢

突出内蔵が減少、表蔵は存続

※寛永十九年（一六四二） 三階蔵規制

二階座敷と周辺眺望規制

※明暦二年（一六五六） 表蔵規制

※万治二年（一六五九） 表蔵規制

●低層・均質化 ステージⅡ（寛文頃～元禄）

（歴博F本・佛教大本など）

突出内蔵、表蔵とも急減、庭蔵は存続

卯建をあげる柿葺、石置板葺の厨子二階が優勢

棟高、軒先線の平均化

二階座敷の居室機能低下（無人）

二 考察

（一） 大阪市美本の町家建築

大阪市美本の町家建築は、大方がその画面下方（およそ、右隻は鴨川以西、左隻は堀川以东）の洛中に配置され、板葺石置屋根の平屋建がもっとも多数で平均的な町家とみなされる。それ以上の階層を有する厨子二階、二階建、三階建の町家を抽出し、その富裕表現を整理すると後掲【表】のようになる。町家No.①～⑳の各建築は、図版【図1】～【図15】中の○内数字を付した建築と一致する。建築種別が特定しかねるものには？を付した。建物背面からの俯瞰、金雲の遮蔽等により二階表が見えない町家は【表】に含んでいないが、突出内蔵を含む土蔵造が付帯する場合はここに含めた。反対に、

土蔵造であっても、寺社に關係する建築とみられるものはここに含めていない。

出光本などを分類した「●多層・多様化 ステージⅠ（慶長～元和初め）」との比較から看取される町家の富裕表現の傾向はおよそ以下の六点となる。○内数字はやはり【図1】～【図15】中の当該建築を示す。

- 1 表蔵の出現 ③⑧⑬⑲⑳㉑㉒
- 2 突出内蔵の増加 ①⑦⑨⑲㉓㉔㉕
- 3 瓦葺塗家が増加 ⑤⑥⑩⑮⑯⑱
- 4 土塗格子（ムシコ）の普及 ①⑦⑧⑨⑩⑫⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕
- 5 出格子の普及 ④⑤⑥⑨⑭⑲
- 6 二階座敷の居室利用 ⑪⑬⑮⑱

大阪市美本に描かれた町家については、従来までは狩野博幸氏が「町家の形態は二階造りが一般的になって、処々に瓦葺の屋根や白亜の土蔵も目につくようになる。」⁴と簡単に触れているのみであったが、改めて各種の富裕表現を念頭に個々の町家を観察すれば、さまざまなコンビネーションによる描き分けを意識した表現がなされていることが確認できる。

先出の丸山氏は、十七世紀初頭には土蔵造、塗家の開口として登場する土塗格子（ムシコ）の性格を論じるなかで、大阪市美本の⑨と⑩の町家を元和期の例として取り上げ、次のように述べた。

「大阪市立美術館本『洛中洛外図』屏風でも、町家は板葺に真壁で、二階表は大開口に板戸や平格子、出格子。その中で、わずかな塗家（⑩の町家をさす…筆者註）が、二階表を土塗格子の開口にしている……大阪市立美術館本では庭蔵や、真壁の町家（⑨

の町家をさす…筆者註)の板葺屋根から突き出す突出内蔵にも、土塗格子の開口がある……これら土蔵建築は土壁の塗り重ねが必要なので、真壁以上の建築費用が必要となる……塗家や土蔵造りの町家は……人目につく富の象徴であった……わざわざ住環境に影響する土塗格子の開口を選択したのは、防火性能の確保だけではなかった。本瓦葺や白漆喰の塗籠とセットで、富裕表現と考えていたと思われる。⁵⁾

「中世の京都の町家に見あたらない土塗格子の開口は、本瓦葺や漆喰塗籠の大壁と共に、城郭建築に意匠的な根拠があった可能性が高い。だから、富裕表現になり得たのである。⁶⁾」

これら町家の建築表現細部が実景そのままの写真でないことはいうまでもない。また作品系統(制作工房)それぞれの志向性(情報選択)にも幅が生じているだろうが、各種富裕表現を当該期における都市景観の趨勢や特徴、またその推移を相対的に把握するのに有効なアイコンと位置づけた絵画史料論の方向性は基本的に支持できるものだろう。と同時に、主として慶長から寛永年間あたりまでの洛中洛外図を考察対象としてきた美術史的な観点では、制作年代がそれほど大きくは隔たっていない諸本間で、町屋の富裕表現にはどの程度可視的な動きをとらえることができるのか、というさらに局地的な問題に関心を向けざるをえない。ここでは「●多層・多様化 ステージⅡ(元和～寛永前期)」におけるその様相について、大阪市美本と同系の科研C群諸本の比較対照により若干の検証を試みておきたい。

(二) 富裕表現と制作年代の同期・連動性

比較対象としてまず取り上げるのは神戸市博本⁷⁾である。前稿では

大阪市美本の制作を寛永初頭頃と考えた。これに対して神戸市博本は、科研C群の景観類型的なプロトタイプに近いと推測され、この系統では制作年代がもつとも上がる元和初頭頃の作例である。

改めて両本の町家建築を比較してみると、神戸市博本よりも明らかに大阪市美本においては各種富裕表現が強調され、その町なみが多層・多様化へ傾きを強めている様相を把握できる。二階表を大開口とし、突出内蔵をもつ板葺石置屋根の町家は神戸市博本にも多く描かれており【図16】、大阪市美本と共通する富裕表現であるが、「●多層・多様化 ステージⅡ(元和～寛永前期)」を特徴づける他の富裕表現が、神戸市博本ではいまだ初期的段階にあると判断できる。その目安となる対照点を列記しよう。

- ・ 柿葺がまだごく少数で、板葺石置屋根の割合が圧倒的に高い。
- ・ 瓦葺塗家は一棟だけ。また庭蔵、表蔵合わせて三階蔵と見れる土蔵造も一棟だけで、多層性強調の意識は低い。
- ・ 突出内蔵ほか土蔵造の開口部が、どれも顔料剥落で断定はできないが、まだ土塗格子になっていない可能性がある。
- ・ 二階表開口部に出格子を装置するのは一棟だけで、残りは板戸。平格子もほとんど普及しておらず、極めて簡素な意匠性で、二階の居室利用を示す意識が低い。

科研C群には、二条城前に朝貢する南蛮人一行を描き込み、大阪市美本よりややさかのぼる元和年間後半頃の制作とみられる林家本⁸⁾がある。その町家の富裕表現は神戸市博本よりは進んで、出格子を中心とした二階表開口など【図17】、大阪市美本にかなり接近していると判断される。

一方、科研C群には淀城天守の存在から寛永二年(一六二五)を

景観年代の上限とし、又衛兵風の人物描写や風俗表現で新傾向をもつ萬野A本（現在所在不明）がある。大阪市美本より制作年代がやや遅れる（寛永前期）と考えられるが、それにつれてさらに町家の富裕表現を強めていることは注意される。

つまり、大阪市美本では表蔵や庭蔵の土蔵造の描写が、瓦葺屋根を俯瞰するように描かれて比較的存在感に乏しい表現であったのに対し、萬野A本では漆喰壁と瓦葺屋根が頭一つ抜けた三階蔵風に描かれ、富裕表現としての土蔵造の存在感が強調されている。また突出内蔵とセットで、必ずしも塗家ではないが瓦葺の町家が増加しているのも目に付く【図18】。さらに真壁の町家の二階表開口の意匠性（出格子、装飾窓、土塗格子など）も一気に多様化するなど、林原本などが分類される「●多層・多様化 ステージⅢ（元和後半～寛永前期）」に近い性格も含んでいる。

以上から、町家の富裕表現が、神戸市博本↓林家本・大阪市美本↓萬野A本という順で多層・多様化の方向へと段階的に強まり、それは諸本の制作年代の下降と同期、連動しているとみなすことができる。洛中洛外図の景観類型としては同一系統（科研C群）にあり、かつ制作年代の幅としても四半世紀ほどの間に位置する四作例だが、町家の富裕表現という点では画一化、類型化がみられず、むしろ案外明確にそれぞれの年代差を浮かび上がらせるメジャーを備えているといえるのではないだろうか。

小結

以上、前稿「大阪市立美術館蔵「洛中洛外図屏風」（田万家旧蔵本）の研究」の補論として、大阪市美本を中心に描かれた町家の建築表

現について考察した。土蔵造や土塗格子（ムシコ）など、各種富裕表現に注目する近年の絵画史料論的な視点によりつつ大阪市美本の描写を検証し、寛永初頭頃の京都の町並みの多層・多様化の一端をうかがった。

また町家の富裕表現と作品の制作年代の同期・連動性についても若干の考察を試み、慶長末から寛永前期の様相をとらえた。もとよりごく限定的な作例間での検討をもとに推考を重ねたものであり、確かな論証へと発展させるには、今後異なる作品系統に対して検証、分析を広げてゆく必要がある。洛中洛外図以外の遊楽図、祭礼図、南蛮屏風など、町家の建築表現を豊富に含む風俗画諸画題も貴重な情報源であり、改めて注意を向けて取り扱うことを期したい。前稿の総論とも合わせ、まずは大方からのご教示をお願いするものである。

註

1 谷直樹「京の町並み」、『近世風俗図譜第三巻 洛中洛外（一）』（小学館、昭和五十八年）所収。同上「洛中洛外図の世界 屏風絵に見る京都中世の暮し」、『京の歴史と文化4 戦国・安土・桃山時代 絢天下人の登場』（講談社、平成六年）所収。

2 ①丸山俊明『京都の町家と町なみ―何方を見申様に作る事、堅仕間敷事』、昭和堂、平成十九年。②同上『京都の町家と聚楽第―太閤様、御成の筋につき』、昭和堂、平成二十六年。上記①、②それぞれ『同書』の各章を編み初出論文。③高屋麻里子「町家と土蔵の変遷―林原本『洛中洛外図屏風』の画像史料研究プラットフォームによる詳細閲覧より」、『第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究 二〇〇二～二〇〇四年度科学研究費補助金 基盤研究（A）（1）研究成果報告書』（代表研究者・黒田日出男、平成十七年）所収。④同上「洛中洛外図屏風に描かれた町家と土蔵の変遷」、『日本建築学会計画系論文集』六〇七号、平成十八年。

3 前掲註2①、②丸山『同書』。

4 ①『日本屏風絵集成 第十一巻 風俗画―洛中洛外』（講談社、昭和五十

三年）、狩野博幸「図版解説No.25・26」。②京都国立博物館編『洛中洛外
 図都の形象―洛中洛外の世界』（淡交社、平成九年）、「図版解説116」に
 も同氏のほぼ同文が載る。

5 前掲註2②丸山「同書」第八章。
 同右。

7 前掲註4②「同書」、No.12作品図版参照。

8 前掲註4①「同書」、No.53・66作品図版参照。

9 前掲註4②「同書」、No.11作品図版参照。

本稿への写真掲載をご許可いただいた作品ご所蔵者、ご所蔵機関に対しま
 して厚く御礼申し上げます。

【表】

【図6】		【図5】		【図4】		【図3】		【図2】	【図1】	図版 No.	町家 種類	
⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	町家
庭蔵	町家	町家	町家	表蔵	町家	町家	町家	町家	表蔵	町家	町家	階層
二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	屋根
瓦葺	板葺石置	瓦葺	柿葺	瓦葺	柿葺	瓦葺	瓦葺	板葺石置	瓦葺	板葺石置	板葺石置	漆喰
塗籠	-	塗籠	真壁	塗籠	-	真壁	真壁	-	塗籠	-	-	二階表 開口部
土塗格子	(開放)	土塗格子	出格子 板戸	土塗格子	板戸	出格子 板戸	出格子 板戸	出格子 板戸	?	板戸	?	卯建
-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	○	○	突出内蔵 開口部
-	-	-	土塗格子	-	土塗格子	-	-	-	-	-	-	その他
-	二階・無人	通庇	-	-	-	-	-	-	-	-	-	のれん
-	-	●鼠色無地	●菘亀	-	●入山形に久留子	●笠松	●富士	●松樹	-	●丸に叶字	-	●暖簾・長暖簾 ▲水引 ■日除

右隻



【右隻】

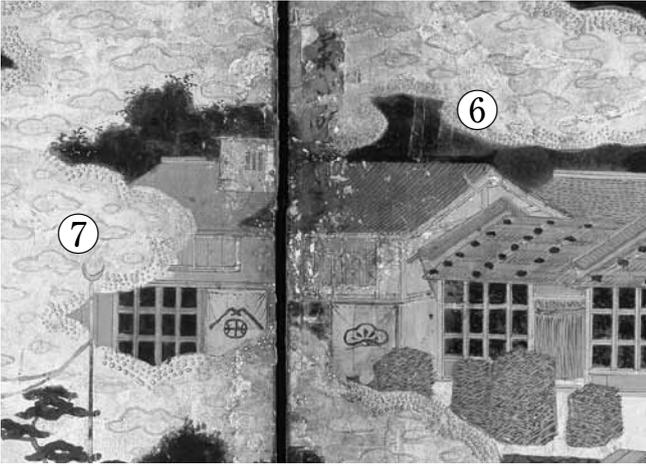
「洛中洛外図屏風」・大阪市美本

【図15】	【図14】			【図13】	【図12】	【図11】			【図10】				【図9】	【図8】			【図7】		図版	
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	No. 町家
庭蔵	表蔵	町家	町家	町家	庭蔵	町家	町家	表蔵	町家	庭蔵	表蔵	町家	町家?	町家	町家	町家	町家	町家	表蔵	種類
三階建	二階建	二階建	厨子二階	二階建	三階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	二階建	厨子二階	二階建	二階建	厨子二階	三階建	二階建	二階建	二階建	階層
瓦葺	瓦葺	板葺石置	板葺石置	瓦葺	瓦葺	板葺石置	板葺石置	瓦葺	板葺石置	瓦葺	瓦葺	板葺石置	瓦葺	板葺石置	板葺石置	瓦葺	瓦葺	柿葺	瓦葺	屋根
塗籠	塗籠	-	-	?	塗籠	-	-	塗籠	-	塗籠	塗籠	-	真壁	-	-	真壁	真壁	-	塗籠	漆喰
土塗格子	?	面格子	なし	?	土塗格子	出格子 板戸	板戸	?	?	土塗格子	?	なし	?	(開放)	なし	?	(開放)	面格子 出格子	?	二階表 開口部
-	-	○	○	-	-	-	○	-	-	-	-	○	-	○	-	-	-	-	-	卯建
-	-	-	-	なし	-	土塗格子	-	-	なし	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	突出内蔵 開口部
-	-	-	通庇	-	-	-	-	-	-	-	-	通庇	-	二階・無人	通庇	-	二階・無人	二階・有人 通庇	-	その他
-	-	●白色無地	▲檜皮色無地 ●紺色無地	-	-	■紺色無地	●丸に桔梗 ■浅葱色無地	-	-	-	-	▲二つ雁金	-	-	▲菱に三つ引 ■紺色無地	-	-	▲宝珠 ●平四つ目	-	のれん ▲暖簾・水引 ●長暖簾・日除

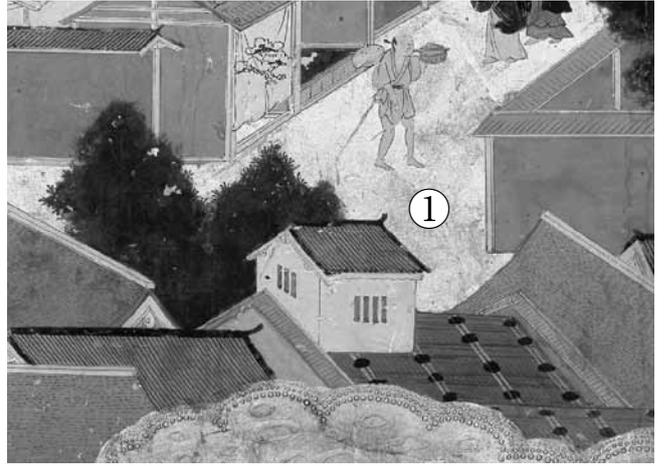
左隻



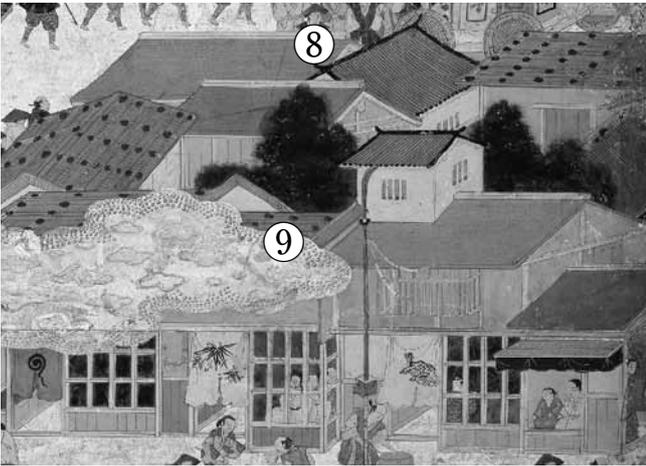
【左隻】



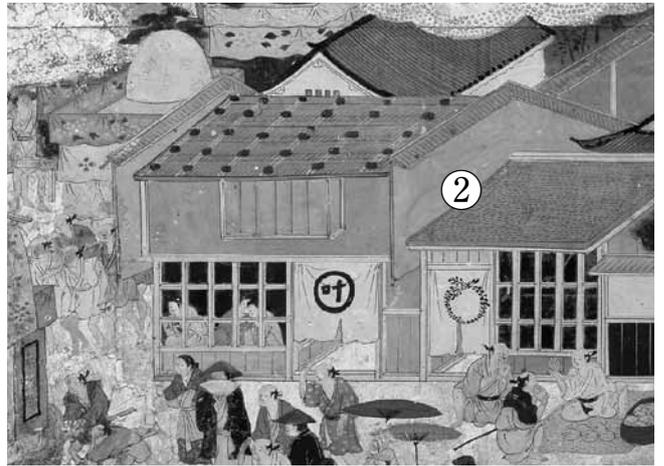
【图 4】



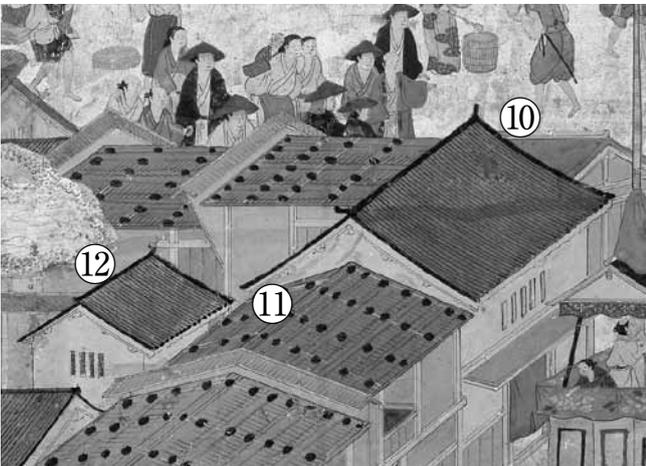
【图 1】



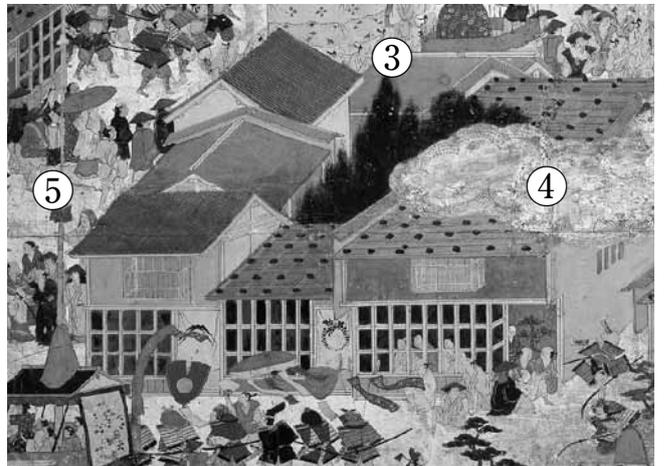
【图 5】



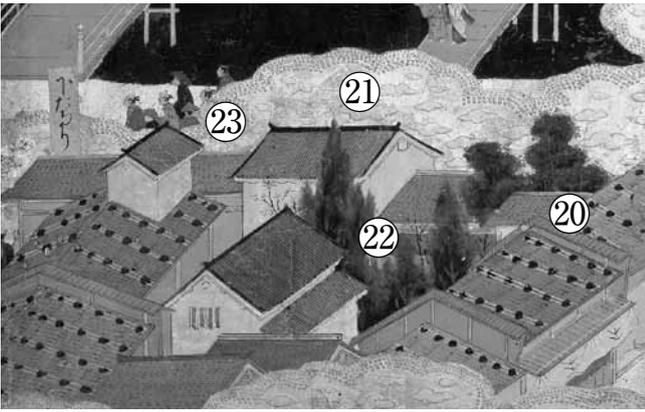
【图 2】



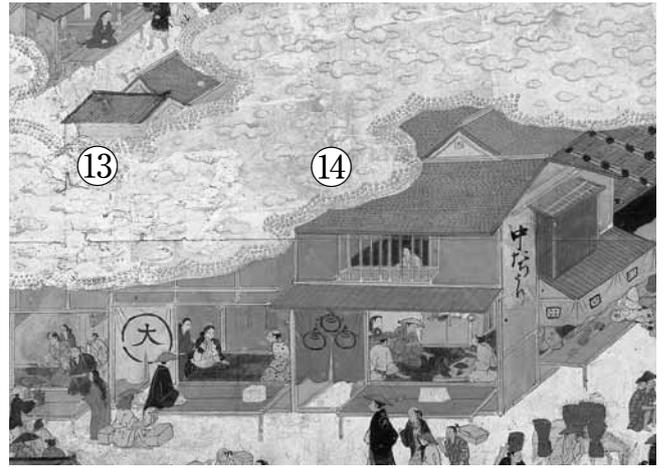
【图 6】



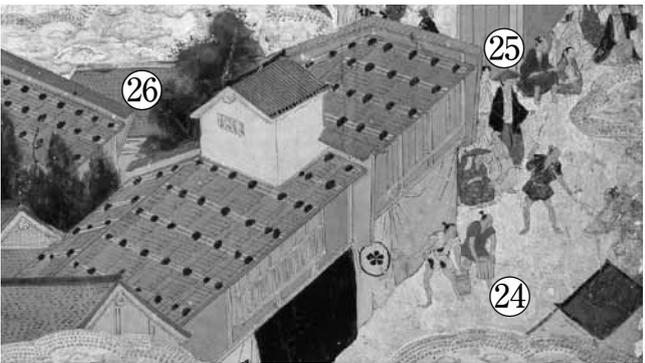
【图 3】



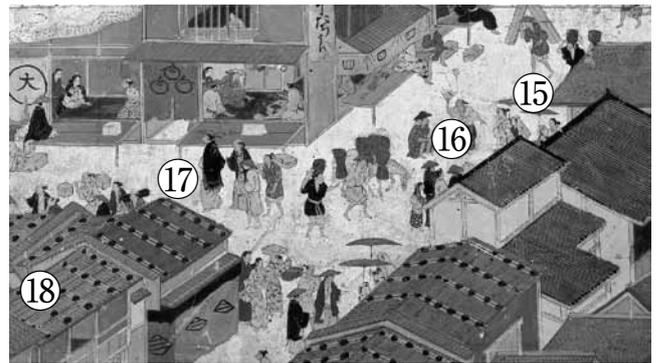
【图10】



【图7】



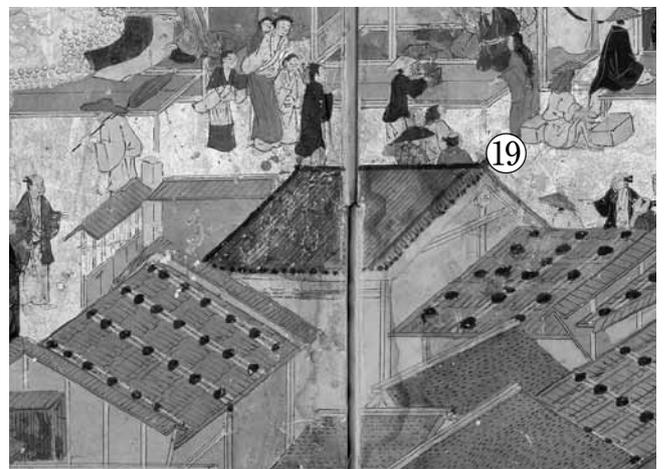
【图11】



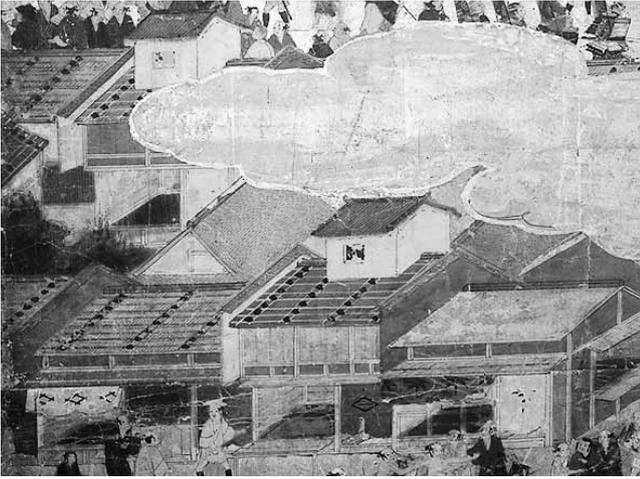
【图8】



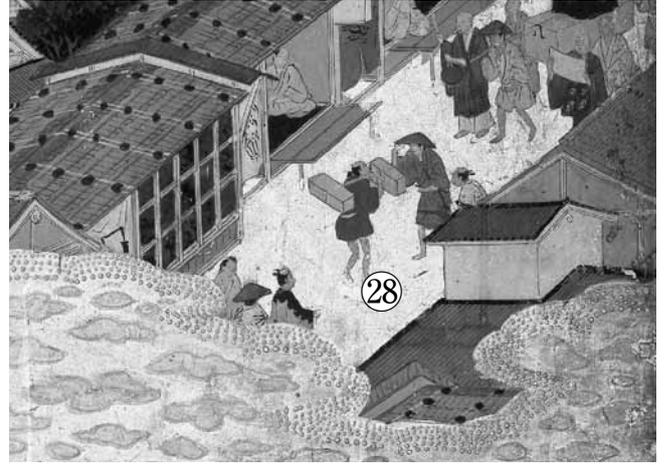
【图12】



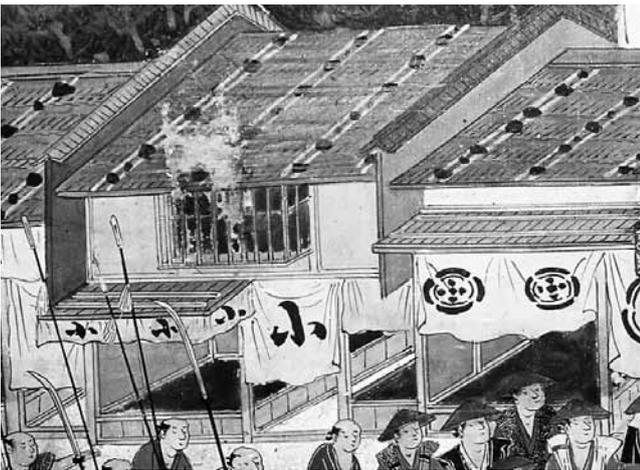
【图9】



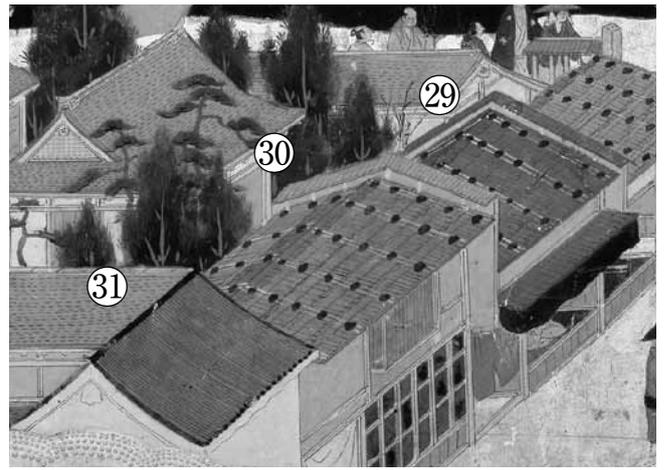
【図16】 神戸市博本の町家 (右隻)
「洛中洛外図屏風」 神戸市立博物館蔵



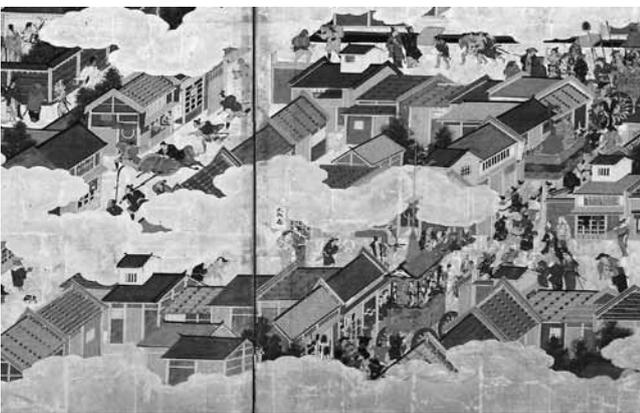
【図13】



【図17】 林家本の町家 (右隻)



【図14】



【図18】 萬野A本の町家 (左隻)



【図15】